

コーディネーターはサービス業である

福原 邦拓さん



沖縄食料産業クラスター協議会での経験

沖縄食料産業クラスター協議会は、「美ら島ブランド創出推進事業」に参加していた県内食品企業が、事業終了後も民間ベースで取組みを進めるために、結成した協議会である。当時、財団法人沖縄県産業振興公社で働いていた福原氏は、退社して沖縄食料産業クラスター協議会の事務局を務めることになった。宮古島のマンゴー農家が組織した有限責任事業組合アグリネット宮古島的那覇事務所である株式会社FAIの所長を務めながらの就任であった。

当初は、沖縄食料産業クラスター協議会という組織が立ち上がり、その事務局業務を株式会社FAIが委託を受けるのかと思っていたそうであるが、実際は、一から作り上げなければならなかったという。関係者との連携構築には、かなり苦労されたそうである。

クラスター協議会設立後の2007年度から、ドラゴンフルーツ・もろみ酢を用いた商品開発、ハイビスカス茶葉・飲料等の開発を手掛け、2008年度には果実酢を用いた飲用酢・菓子・調味料の開発、2009年度には県産豚肉を使用した「新ぶたりめ」の開発を実施している。分科会や研修会も年数回、開催している。

現在30代半ばである福原氏は、琉球大学を卒業後、全日本空輸株式会社（ANA）の那覇空港サービス業務を実施している株式会社エアークンに4年半勤務している。ここで、サービス業としてのお客様に接する精神を学んだという。福原氏の言葉を借りると、「ある商品を開発して市場に投入し、価値の連鎖をたどると、言うまでもなく消費者にたどり着く。常に消費者の方向を向いて仕事に取り組む精神は、接客や営業活動の現場で、お客様に直接向き合った経験により形成された」という。

その後、財団法人沖縄県産業振興公社に移られ、内閣府が実施する「空き店舗活用起業支援事業」の事務局を2年ほど担当している。ここで、公的機関としての支援業務の経験とともに、幅広い業種の若手起業家とのつながりや申請書作成のノウハウを得たという。

現在、株式会社FAIの那覇事務所長及び沖縄食料産業クラスター協議会の事務局を4年半務めている。

それ以外にも、クラスター協議会の理事を中心に、会員企業と2ヶ月に1回程度、集まりを持ち、情報交換を行っている。会議後は、懇親会も企画することが多く、その話の中で、新たな連携が生まれることもあるという。インフォーマルな場を定期的に持つことも、事務局の大事な役割だと考えているそうである。

果実酢を用いた飲用酢の開発(株式会社紅濱)

クラスター協議会が関わって商品開発を行った代表的な事例として、ここでは、果実酢を用いた飲用酢を開発している株式会社紅濱の取組みを紹介する。株式会社紅濱の販売部長 下地雅人氏にお話を伺った。

紅濱では、2008年度のクラスター事業を使い、沖縄のフルーツを利用した「飲むフルーツ酢」を開発している。現在、シークワサー、マンゴー、タンカン、アセロラ、パイナップル、グアバ、パッションフルーツの7種類のラインナップを有している。

旧来の商品は、果実を焼酎に漬けていたが、新商品開発では、琉球大学とも共同し、果実をそのまま醸造する方法を開発し、最後に果汁を加えることで、飲みやすさを追求したものとなった。パッケージに関しても、デザイン会社と協力し、新たなデザインに切り替えた。「フルーす」というネーミングも「飲むフルーツ酢」とし、分かりやすいものとした。また、展示商談会等にも出品し、試飲会を重ねる中で、ターゲットを女性に限定して開発を進めた。消費者の声を聞く中で、果汁も県産品に限定する必要性を感じ、これまで、シークワサー、タンカン、パイナップル以外は、輸入原料を利用していたが、マンゴー、アセロラも県産原料に切り替えようとしている。2010年11月からラインナップに加わったパッションフルーツも、県産品を使用している。

下地氏によると、クラスター事業にかかわる中で、大学や農業者、異業種との連携の大切さを学んだそうである。また、事業実施に伴う煩雑な事務処理なども、クラスター協議会事務局の存在で助けられたという。



▲ デザインを一新した「飲むフルーツ酢」シリーズ

株式会社FAI那覇事務所長としての活動

クラスター協議会の事務局は、民間企業である株式会社FAIが担っていることから、クラスター協議会事務局としての経験を、福原氏は自社の商品開発にも生かしている。FAIは、宮古島の農家が連携したLLPアグリネット宮古島の商品開発企画部および那覇営業部として業務を行っているため、宮古島のマンゴーを使用したゼリーを食品メーカーとの連携によって開発した際のトータルコーディネートを実施している。

販売先は、ネット通販とともに、クラスター協議会会員でもある株式会社沖縄県物産公社（わしたショップ）で販売している。宮古島のマンゴーをふんだんに使用した高級品という位置づけで、わしたショップの客単価を上げたという。

さらには、マンゴージュースもクラスター協議会の会員企業である株式会社沖縄バヤリースとの連携で開発している。沖縄食料産業クラスター協議会の前会長であり、現顧問である沖縄バヤリースの取締役営業部長 我那覇 明氏によると、「地域に所在する企業としては、地域貢献をしていかなければならないので、地域企業からの話であれば小ロットでも加工を請け負う」という。これもクラスター協議会の取組みの成果といえよう。

福原氏は、自社以外にも、北大東島の農家や地元企業が連携した新商品開発の取組みのコーディネートも行っている。地元農産物の月桃を活用した化粧品・ちんすこう、じゃがいもを活用したじゃがいも麵の開発である。これまでの経験を生かし、地域全体を巻き込み、地域活性化につながる商品開発を進めた事例である。

コーディネーターとは

福原氏に、これまでの経歴の中で、現在のコーディネート業務に役に立っている経験を挙げていただいた。最も役に立っていると言っていたのが、接客業や営業の経験で、クラスター協議会のコーディネーターはサービス業の精神で務めなければならないという。さらには、食品企業での製品開発や販売戦略・マーケティングの経験も重要であるという。これは、現職であるFAIでの業務経験が、コーディネートにも生かしているということである。食品企業での営業を経験すると、食品業界での人脈も形成され、それは有効活用しているそうである。沖縄県産業振興公社で、国や県の補助金等の申請業務経験も、役に立っているという。これまでに、製品開発から営業まで複数の企業、さらには企業支援機関での業務経験を有していることが、コーディネーターの経験値を上げることになっているようである。

(文：社団法人食品需給研究センター 藤科智海)